

THE GALLERY

もくじ ■特集|コロナ禍とアート その1:コレクター田口美和さんへのインタビュー その2:美術館という場所で——今だからできることを
■企画展のご案内「Next World-夢見るチカラ タグチ・アートコレクション×いわき市立美術館」
「クレパス画名作展 近代の巨匠から現代の作家まで」「tupera tuperaのかおてん。」 ■常設展示室から ■今後の展覧会

特集|special issue — コロナ禍とアート

その1:コレクター田口美和さんへのインタビュー



現代美術をコレクションする

_____ 昨年はコロナで日本の展覧会事情も影響を受け、当館も一時臨時休館しましたが、「Next World-夢見るチカラ タグチ・アートコレクション×いわき市立美術館」展は一年延期が早々に決まり、来月満を持しての開幕となります。タグチ・コレクションさんが国内のコレクションだったからこそ柔軟に対応していただけたという部分があったと思います。改めて日本にコレクションがある事の凄さを感じ、お話を伺いたいと思いました。

田口 そう仰っていただくとすごく嬉しいです。コレクションってやっぱり、何となく出来るものではないと自分でも思っているのです。先達がどういう事してきたか興味を持って調べたりしているんです。そういう意味では、今回、旧大光コレクション¹と一緒にできるというのはとても貴重なご縁に感じています。大光コレクションの本も読んだのですが、コレクターの、何ていうのかな、一種の酔狂^{よきやう}というか、ちょっと変ですよ(笑)。半分変なぐらいの執着^{しやくしやく}というか、情熱^{じやうねつ}というか、そういうものが駒形さん^{こまがた}²にもあるし、それから現在は兵庫県立美術館に収蔵されている山村コレクションも。コレクターの山村徳太郎さんは、「具体^{ぐたい}³」に特化して残そうと決めた時から、買い替えをしたり再制作を依頼したり、コレクションを充実させるという事について生涯かけて考え徹底的に実践した人なんです。兵庫県美に収蔵された後の記念展を見ましたが、

PROFILE 田口美和 タグチ現代芸術基金 Executive Adviser、アーツ・プラス現代芸術研究所代表理事。父・田口弘氏が開始したタグチ・アートコレクションを引き継ぎ、収集、運営、普及活動を行う。

名品ばかりでクオリティがとて高くて驚きました。コレクションとはどうあるべきなのかを考えさせられるし、すごく勉強になりますね。だけど実際にコレクションする当事者って凄く少ないので(笑)、なかなか共感してもらいにくい部分でもあります。単純にお金があるから買える、みたいに見られるんですけど、ある一定の規模やこだわりを超えるとそれだけでは済まないおかしな領域に入ってくるので(笑)、そういうのを一番共感してもらえるのは美術館の人だろうなと。館蔵のコレクションを持ち、それをどう残し、管理し、見せていくかという点では同じ方向を見ていると思います。

_____ 普段は一年中国内、海外を飛び回っていらっしゃる状況ですか？

田口 一年中という程では無いですが、海外の色々な展覧会やアートフェアの大きなイベントなど、見ておいた方が良いものは大体毎年行く感じです。年に7~8回かな。2月はメキシコ、3月はニューヨーク、香港、5月も場合によってはニューヨーク、ピエンナーレがあるので2年に一度はヴェニス、6月はバーゼルのアートフェアに行って、夏の間はオフなんですけど、10月にロンドンのフリーズアートフェアとか、あとはパリ。12月にアメリカのマiami、フロリダ、ロス。定期的に開催されるイベントを基本に、新たな出会いを求めて1、2箇所今までいった事のない所を混ぜています。

¹1950-70年代に新潟の大光相互銀行社長によって形成されたコレクション。その一部である戦後アメリカ美術の作品群がいわき市立美術館に収蔵されている。

²駒形十吉(1901-1999)は大光相互銀行の社長として近現代美術の作品を収集し、コレクションを展示するため長岡現代美術館を設立した。

³1954年に画家・吉原治良を中心として関西で結成された前衛美術グループ。

_____ 美和さんが現代アートに関心を持たれたのはやはりお父様の影響でしょうか。

田口 初めて自分の所のコレクションを見たのは2011年の損保ジャパンの展覧会で、オープニングに家族でみんなで行って「へえ～こんなの持ってるんだ」という(笑)。もともと父はミスミ・コレクションを会社の方でやっていたので、家に持ってきて家に掛けるというスタイルではなかったんですね。その後社長を退任して個人で買うようになって結局その延長でやっていたから、自宅に持ってくるというよりはそのまま倉庫に入れてました。2011年に初めて展覧会を見に行った時のことはよく覚えてますけど、その時は全然アートを知らなくてですね。

_____ その時いかがでしたか、現代アートという事で衝撃的に感じられたのでしょうか。

田口 どうだったかなあ。「え、何これ」とは思わなかったですね、興味は持ちました。ただ馴染めないと思う作品もあった。加藤泉さんのペインティングも最初はちょっとコワイなと思ったし(笑)。

_____ 独特ですもんね(笑)。

田口 そう、今は大好きですけど。当時アートに興味を持っていたのがきょうだいの中で私だけだったんですが、父が何を持っているか誰も把握していないのはちょっとマズイよね、誰かが一緒にやったほうがいいんじゃないかという事で、自然に私が手伝うようになりました。それで2013年にスパイラルでの展示をやったんです。自主展覧会だったから受付も会場整備も全部自前で、私が父の代わりに全部そういう対応をやって。色々やっているうちに、じゃあ、海外に見に行ってみようかという話をやればという話になって。それが2014年の12月で、実質2015年から海外に見に行くようになりました。ただ、アドバイザーの塩原さんが全てを知り尽くしていらっしゃる方なので、必要な、見なきゃいけないものをしっかり見せていただき、早道で学ぶことができました。

オンラインはリアルの代わりにはならない

_____ 昨年は作品収集においてもオンラインが増えたのでしょうか。

田口 そうですね。ただ、既に何度か見たことがある作家さんで作品画像だけで判断ができるような場合ならオンラインでも可能だと思うんですけど、初めて見る作家さんはオンラインではやっぱり分からないなと思っちゃいますね。リアルのアートフェアでは、多くの作品を見て回るうちに作品自体が印象に残ったり目に飛び込んでくる。オーラのものを感じ取って気になる作家さんを見つけに行くような感じがあるんですけど、オンラインだと分からないんですよそれが。そういう意味では若い作家さんが大変なんじゃないかしら。若い作家さんは、コレクターやアートが好きな人達の目に触れて、アンテナに引っかかって覚えてもらう事が大事じゃないですか。それがオンラインでは少し難しいですね。皆同じように見えちゃうし、皆良くも見えるし、皆それほどでなくも見える。うちは特に予算的な都合もあって大御所で高額な方というよりはこれからどんどん活躍しそうな比較的若手の人たちを中心に購入しているので、そうするとちょっと買いづらくはありますね。それに、オンラインはね、コレクターもだんだん疲れてくる(笑)。コロナの影響が出始めた4～5月のアートフェアはオンラインでやったりして、私もその頃は見えてましたけど、去年の後半になるともう疲れちゃったなという感じで。

_____ 画面から情報を読み取ろうとするのはすごく疲れますよね。直接対面するとワッと入ってくるけれども。

田口 ワッと入ってくる。でも画面を通じて来るものは情報だから。仰る通り読み取るのが非常に疲れます。リアルで出来ない事が出来たりして面白いから否定はしないんですけど、リアルの代わりにはならないなという感じはありますね。

「誰かに見てもらうこと」を目的にする

_____ 誰かに見てもらう事を念頭に収集するという事、かつ、専有会場を持たないで公立館で見てもらうという基本方針が興味深いです。

田口 確かに今になってみるとちょっと変わった方針かもしれませんが、当コレクション的には割と自然な流れでそうなった経緯があります。父が会社のコレクションとして始めた際に、社員にも見てもらってイノヴェティヴな感覚をシェアするために会社に掛けたという経緯があり、その延長線上で個人のコレクションが始まっている。

_____ なるほど、自分で楽しむというよりかは。

田口 はい、人に見てもらうために買うという方針を前史のミスミ・コレクションから受け継ぎ、何となくそのまま来たというのがあります。それと、大抵どなたにも「美術館は作らないんですか」と聞かれるけれど、父は方針として最初から持たない主義で。それはビジネス面のスタイルから来てます。持たざる経営と言われたんですけど、全部会社の中で内製化してしまうとフレキシブルに変われない。業界の構造が変わったりした時に、ここを切りたいというのが切れなくなるのでそれをアウトソースしておき、環境が変わったらチェンジすればいいという考え方です。そうなる箱(場)を持つ事が最大のやってはいけない事で、持ってしまうと、今度は箱を運営することに経費や労力が持って行かれてしまう。なのでコレクションのコンテンツだけを見て箱に支配されたようにしたいというのが、最初から父の中ではかなり明確でした。私も手伝っていくにつれ、日本には立派な箱が沢山あるという事に気が付いてきたんです。日本人の建築って優秀で、世界でもすごく有名だし尊敬もされていて、そういう人たちが作った美術館が各県に綺羅星のようにある。そういう所でもし箱の中身が足りていないんだったら、作品を持って行って見てもらうのが一番良いんじゃないかなと。

_____ かつて日本では公立美術館建設ブームというのがあり、日本各地に沢山の美術館が存在するという状況を作っていますね。

田口 せっかくあるけれど活かされていないという逆転現象が残念ながら多い気がします。公立美術館を初めとする公的セクターの文化や美術における役割ってとても重要だと思うんですけど、そこがパワーが無い状態にある。よく私は三重苦というんですが、バブルの崩壊以降、お金(予算)がない、人がいない、コレクションがないという状況にどこも苦しんでいます。少しでもうちが作品を持っていく事で世界のアートや文化の流れ、情報を伝える事ができるのであれば、パワーが落ちている所も多少元気になってくれるんじゃないか、そういう応援をしたいなと今すごく思っている所ですね。予算がつかないという面では、やっぱり納税者が納得するかが課題になっている。学校の先生から、クラスの子はほとんど美術館に行った事が無いというお話をきくと、やはり予算を割きにくい状況になっちゃっているんだなというのはいくらも分かります。なの

で東京より地方、さらに美術館の外にもアウトリーチしていく、ということが今は大事だなと思っています。

_____分かってもらうという事です。

田口 そうですね。公共財としてのアート、そして文化行政にお金をかける事の大切さを一般の人たちにも理解してもらいたいです。それには良い作品を見て、自分の糧になると実感してもらう事が必要なと。ドイツのメルケル首相が「アートは必要なんです」ってコロナ禍になった途端に言ったという、あの辺の感覚には文化というものが根付いているなど感じます。日本ではまだやっぱり、メディアが企画したブロックバスター展が来て教科書的に教養として見に行く。美術館に行く人口は世界から見ても多いけど、文化に対して本当にお金を使っているかというところじゃないという現実が中央政府にも地方にもある。やっぱり草の根で起こしていかないとアートが市民権を得られないんじゃないかというほど危機感に近いものを感じているんですね。特に現代アートに関して言えば、あれは「世界の入口」でもあります。作品に自分たちの国と全くかけ離れた価値観、世界観、日常が表現されていて、それを見ることで違う立場の人たちを理解する。そういう風に世界が広がっていく入口に現代アートはあって、それが「作品」としてオンタイムで「今」ある、というのが特徴なのです。そういう意味でどんどん若い人たちに覚えてもらって、面白いし自分たちにプラスになるという事をどこかで感じてくれれば良いんですけど。やっぱりアートは、コレクターが私的な資産として買って家に置いて限られた人しか見れない、という事じゃないほうが良いと思っているんですね。もちろんそういう楽しみ方もあるけれど、やっぱり本当に良い作品って皆でシェアしたほうが楽しいし、公共財としての価値を持ってくるものだと思います。だからパブリックという事にうちは意識が向いているんです。

_____ タグチ・コレクションのような、本質的な意味でパブリックな活動をしてくれる存在がもっと市民に認知されて欲しいですね。

田口 おかげさまで昨年度、文化庁長官表彰⁴を父がいただくことになりました。公立美術館の収蔵品購入予算が厳しい中で、プライベートな現代アートコレクションが色々購入をして日本に作品を残している貢献というのを、国の方でも評価していこうという方向性があるようなんです。父は現代のそういったコレクターの最年長ぐらいなので、(コレクターに対する表彰の)最初だったのだと思います。昨年、当コレクションは完全にパブリックなものとして作品を残していくという方針を採り、基金を立ち上げました。明確にそういう風に掲げているコレクションはプライベートではそうは多くないと思います。海外だとコレクションの世代交代は普通簡単にできますけど、日本だと税金の問題で簡単にはできない。そうすると売却などによってせっかくのコレクションが散逸してしまう事にもなり兼ねない。そこで田口家の資産じゃなくて、パブリックな基金という入れ物に入れて、そこに残していこうねと。パブリックなというのは寄付しちゃう、あげちゃうという事です。家族も納得してくれました。海外に行くと、目の前にルーブルがあり、オルセーがあり、ナショナルギャラリーがあり、MoMAがあり、人々は第一線の作品を日頃から見て育っています。そういうのをいつでも見に行ける人たちとそうじゃない人たちでは、同じアートの世界を目指すにしても最初からハンデですよ。知らない、見た事がない、感じた事がないというのはスタートラインから不利です。インターネット時代になってオンラインでも情報が入ってくるようになりましたが、先ほど言ったようにリアルを見るという事はまた別の事です。それをできるだけ早い段階で若い人たちに覚えてもらいたいと願っています。

[聞き手=主任学芸員 太田紋乃/()内は編集による補足]

⁴父・田口弘氏は、「永年にわたり、現代アートコレクターとして、国際的な現代アート作品を蒐集し、『タグチ・アートコレクション』として各地の美術館で展覧会が開催されるなど、我が国の現代アートの振興・普及に多大な貢献をしている」として令和元年度文化庁長官表彰を受けた。

その2:美術館という場所で——今だからできることを



鈴木昭男 サウンド・インスタレーション

開館以来、さまざまなアート表現との出会いの場として開催してきた「マンスリー・コンサート」改め「コンサート&パフォーマンス」。美術館という場所だからこそ可能な自由で発展性のある表現をアーティストと一っしょに考え、チャレンジしていただいていたお陰で、いわきならではの味のある時間を多々提供することができた。新型コロナウイルス感染症蔓延という思わぬ事態に直面した令和2年度には、美術館という空間そのものを音の共鳴体へと変幻させる稀有なアーティスト2組を予定していた。一組目は、9月20日、サウンドパフォーマーの草分け鈴木昭男とサックス奏者でありフリー・インプロヴァイザーとして活動するジョン・ブッチャーの共演が実現するはずだった。しかし、イギリス人のジョンがコロナ禍のあおりを受け出国できず、急遽、鈴木昭男のソロ・パフォーマンスに変更。オリジナル音器アナラポス原器やグラス・ハーモニカ、手製の石笛などの即興演奏は、3階まで吹き抜けた御影石造りのエントランスに心地良く共鳴し、鈴木自身も大満足と感想を残す良質なサウンド・イン

スタレーションを実現した。二組目は、令和3年1月11日の成人の日、「春を祝う」をテーマに毎年常設展示室で開催するパフォーマンスに水嶋一江とストリングラフィ・アンサンブルを予定。当館の現代美術の作品の中で水嶋作曲によるストリングラフィのためのオリジナル曲を紹介するための準備を進めていた。年末から年始にかけて首都圏での感染者急増のニュースには、スタッフ一同頭を抱えどよめいたが、なお一層心を引き締めて万全の準備徹底に注意を払いながら開催当日を迎えた。

参加者の定員は1回40名を上限とし、完全予約制、指定席制、連絡先の把握など、万が一の場合の対応にも配慮した。観覧席は約1.5m間隔を目安にセットし、立ち見が出た場合は、連絡先を把握した上で極力距離を保てる場所へと誘導。手指の消毒、マスク着用の徹底、楽器や演奏者との接近・接触の禁止など、募集段階から理解を得よう周知徹底し、万が一の中止についても事前の了承を得ながらの準備となった。常設展示室はロビーに比べて空気の流れが良くないため、演奏時間外の換気、演者にもマウス・シールドの着用をお願いし、和気あいあいとしたトークも封印するなど、安全第一を徹底して何とか無事終了、今を送っている。

感染が不安という理由でキャンセルは多かった。しかし、新たな申し込みは当日まで続き、あつという間に空席が埋まったのも事実。満席となった会場は整然としてマナーも良く、拍手だけが熱くいつまでも会場を震わせた。館内に放たれこだまする音に呼応しながら次々と繰り広げられる鈴木昭男の即興演奏。最長部約13mもある絹糸と紙コップでできた巨大な弦楽器を4人のパフォーマーが絶妙な掛け合いで奏で舞うスト

リングラフィ・アンサンブル。それらはいずれも、会場全体を包み込む波動となり参加者の五感を心地よく震わせ大きな感動をもたらした。

かつての大震災を経て後、心に潤いや安らぎ、活力が枯渇したあの時ですら、たとえ微力だろうがアートには、私たちの支えになる力があると確信できた。その思いを一人でも多くの人々と分かち合うために、美術館ならではのアートの力を信じた活動は、続けていかなければならない。新型コロナウイルスの蔓延という一つの試練は、新たなアート・イベントの仕掛けを生み出すチャンスにもなる。柔軟な想像力で発想し実行する力が今こそ試されているのだろう。

(学芸員 柴田百合子)



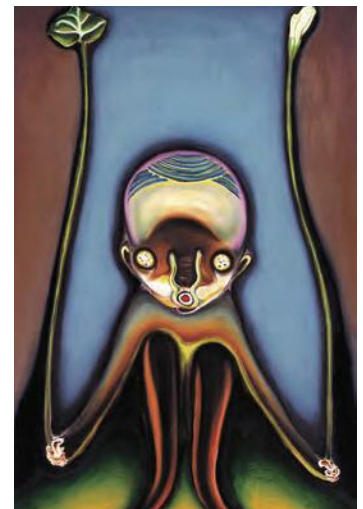
ストリングラフィ・パフォーマンス 光の記憶～今、ひかりを求めて～

企画展 | Next World-夢見るチカラ タグチ・アートコレクション×いわき市立美術館 4月3日(土)~5月16日(日)

昨年、新型コロナウイルス感染症感染拡大に伴う緊急事態宣言(2020年4月)を受けて延期となった「Next World-夢みるチカラ」を10か月の充電期間を経て開催します。

本展は、国内有数の現代美術コレクションである「タグチ・アートコレクション」と、1984年の開館以来国内外の優れた戦後の美術を収集の柱としてきた当館コレクションとのコラボレーションにより、現代の美術の魅力を紹介する展覧会です。1959年制作の草間彌生《Interminable Net no.1》(いわき市立美術館)から、2018-19年制作のグザヴィエ・ヴェイヤン《ナターシャ》、《マンフレディ》(タグチ・アートコレクション)まで、展示場には国境や時代を超え、手法も素材も様々な112点の作品が並びます。これらの作品が発するメッセージは、「現代」を生きる私たちの心を奮わせ、未来をイメージするチカラとなるはずです。

ロブ・ブリット 《ハイ、バーイ(赤)》
2008年
タグチ・アートコレクション
©Courtesy the Artist, and Massimo De Carlo Gallery Milan/London/Hong Kong. Copyright the Artist



加藤 泉 《無題 2009》 2009年
油彩・カンヴァス 194.0×130.3cm
タグチ・アートコレクション蔵
©2009 Izumi Kato, Courtesy of the Artist

企画展 | クレパス画名作展 近代の巨匠から現代の作家まで

5月29日(土)~7月4日(日)



鴻池朋子 《Little Wild Things》 2015年 サクラアートミュージアム蔵

クレパスは、1925年(大正14年)に日本で誕生した描画材料です。クレヨンとパステルの特性を兼ね備えたクレパスは、着色性が良く伸展性に優れているうえ混色も自在で、油絵具に近い表現が可能です。油絵具の入手が困難だった戦中・戦後には多くの画家たちが注目する画材となり、やがてその持ち味を生かしたオリジナリティあふれる作品が生まれていきました。

本展は、サクラアートミュージアム(大阪)のコレクションによって構成されるもので、クレパスの開発と普及に関わった画家山本鼎をはじめ、梅原龍三郎や小磯良平、岡本太郎など大正・昭和期の巨匠たちから現代の作家までの幅広い顔ぶれによるクレパス画の名品を展示します。

企画展 | tupera tuperaのかおてん。

7月17日(土)~8月29日(日)

亀山達矢(かめやまたつや)と中川敦子(なかがわあつこ)による2人組の人気ユニットtupera tupera(ツペラ ツペラ)。絵本やイラストレーションを中心に幅広く活躍するアーティストです。

この2人組のユニットによる本展のテーマは、ずばり「顔」。絵本『かおノート』『こわめっこしましょ』など「顔」をテーマにした絵本原画を紹介するほか、映像作品「かおつくりズム」、2メートルの大きな顔が並ぶ新作「かお10(テン)」、さらに謎の「床田愉男(ゆかだゆかお)」との顔遊びなど、平面・映像・立体と新作も含めたさまざまな表現の作品を展示します。

大人から子どもまで、ゲラゲラ、ドッキリ、ワクワクが続くtupera tuperaの楽しい世界をどうぞお楽しみください。



《謎のおおきな「床田愉男」》 撮影:阿部高之

常設展示室から



柄澤齊
《肖像 XI ジェームス・アンソール》
1983年 木口木版・紙
16.7×11.3cm



高田洋一
《翼IV》
1981年 和紙・竹・ガラス
110.0×210.0×145.0cm

古代ローマの著述家、大プリニウスは、著書『博物誌』の中で絵画の起源として次のエピソードを伝えています。古代ギリシャの娘が、戦地に赴く恋人が眠っている間にランプで顔の輪郭の影を壁に写し、その輪郭をなぞったのが絵画の始まりなのだ、と。つまり「人を描く」ということが、美術誕生の大きな動機のひとつと考えられていたのです。

2021年前期、常設展示室向かって左側では「肖像をめぐる」と題し、現代美術における肖像表現を紹介します。版画家、柄澤齊の〈肖像〉シリーズでは、美術家、文学者、音楽家といった古今東西の偉人が、精緻な木口木版で表されます。偉人の作品やエピソードと絡めて、時に異様な形に変容した肖像表現には、版画家のユーモアと想像力が炸裂しています。自画像(self-portrait)もまた肖像(portrait)と言えるでしょう。鈴木実の木彫の大作《私

自身の肖像》では、不在の作家自身を示す巧みな表現に、「なるほど!」と思わずにはいられないでしょう。どんな自画像なのかというと……どうぞ展示室をご覧ください。

展示室向かって右側のテーマは「現代美術の実験室」。「実験」というテーマでちょっと科学的だったり、数学的だったり、実験精神に溢れる作品を紹介します。高田洋一《翼IV》は、4枚の羽根が僅かな空気の流れに反応してゆっくり、ゆらゆらとはためく作品。また、錯覚や視覚的な効果を美術に取り込む実験をした「オプ・アート」から、ヘスス・ラファエル・ソト《黄と青と黒のT》を展示。土台に描かれた描線と、その表面に無数に生えるT字の細い棒が、見る角度によってうねるような視覚効果をもたらします。「現代美術の実験室」に訪れ、夏休みの自由工作のヒントを探してみては？

(学芸員 徳永祐樹)

今後の主な展覧会のご案内 (新型コロナウイルス感染症の拡大状況により、中止や延期、または内容等に変更が生じる場合があります。)

企画展

Next World—夢見るチカラ タグチ・アートコレクション×いわき市立美術館

令和3年4月3日(土)～5月16日(日)

クレバス画名作展—近代の巨匠から現代の作家まで

令和3年5月29日(土)～7月4日(日)

Tupera tupera のかおてん。

令和3年7月17日(土)～8月29日(日)

常設展前期

「現代美術の実験室」

令和3年4月1日(木)～9月5日(日)

I「肖像をめぐる—いわき市美の「かおてん」 Vol. 1」

令和3年4月1日(木)～6月13日(日)

II「肖像をめぐる—いわき市美の「かおてん」 Vol. 2」

令和3年6月15日(火)～9月5日(日)